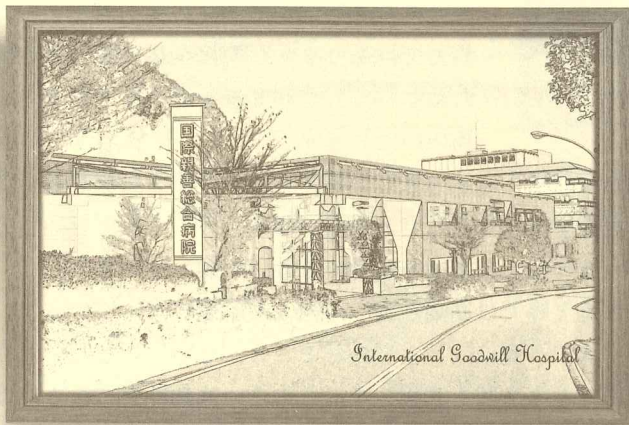


病院だより



地域で共に生きる病院をめざして

Makoto Shimizu

清水 誠

手の病気について

Kozo Morita

森田 晃造

手術室の紹介

Manami Kobayashi

小林真奈美

国際親善総合病院

〒245-0006 横浜市泉区西が岡 1-28-1
TEL 045 (813) 0221 (代表)
FAX 045 (813) 7419 (総務課)

当院ホームページをご覧ください。

<http://shinzen.jp>



地域で共に生きる病院をめざして



平成26年1月より副院長に任じられました。今まで循環器内科や安全管理、救急集中治療、教育、検査・輸血などの委員会での活動を通じ、診療部長として病院運営にも多少関わってきましたが、今後は村井病院長と飯田副院長の御指導をいただきながら微力ではありますが病院全体の益々の充実と発展のために尽くしたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

当院の使命は理念にも示されているように、良質な医療を親切に実施し、信頼される医療を実現することだと思います。そして医療を通じて横浜市西部地区の皆さまの安心な生活を実現できればと願っています。

昨今のマスコミ等では高齢社会への突入が話題になっています。多くの未来予測の中で人口予測はほとんど外れることがないと言われており、近い将来日本は今までの文明も直面したことのない高齢社会になるのは確実でありましょう。この高齢社会の中で当院のやるべきことは何でしょうか。高齢社会の医療における特徴の一つは地域完結が今まで以上に重要視されるであろうということです。高齢者にとって遠くの理想郷よりも近くの安心、未来のバラ色の生活よりも明日の安全の方がはるかに重要なことです。これを病院での診療におきかえれば、それは1つは患者さんの今そこにある危機を如何に乗り越えていくかという切実な問題です。またその危機が不幸にして乗り越えられない場合は、医療者としては傷病者に寄り添う態度が非常に重要です。

地域の中で起きる様々な医療上の問題をスピーディーにこの地域で解決していくこと、このためには当院では何が足りなくて何をしなければいけないのか、副院長就任にあたって更に知恵を絞って体力の許す限り尽力していきたいと思っていますので、皆さまの忌憚ない御意見、御指導を宜しくお願いいたします。

手の病気について

みなさんは普段何気なく手を使われていると思いますが、手は「第2の脳」ともいわれ実に複雑な機能を持っています。「持つ」「握る」「技」「掴む」など、手の動作を伝える漢字は400種類以上あります。複雑な運動が可能であることから、人類は手を使うことによって道具を作り、文明を発展させてきました。現在の高度文明社会は細かな動作を行える手や指があったからこそ発展したと言っても過言ではありません。この繊細な知覚と複雑な運動に対応するため、手の感覚や運動に関連する領域は人間の脳のかかなりの部分を占めています。

そのため手の怪我や病気を適切に治療しないと、日常生活に大きな支障が生じます。また手は常に露出して使うため、手指の変形は患者さんにとっては大きなハンディキャップとなります。

私が専門としている「手外科」という分野は聞き慣れないかと思いますが、手・指・腕・肘の様々な病気を扱う分野です。「外科」といっても手術だけを行うわけではなく、リハビリテーション・薬物療法、装具療法など手についての多くの治療を行っております。繰り返しになりますが、手指の痛みやしびれ、変形などの障害は日常生活において大きなハンディキャップとなります。また放置することによって、多くはさらに重篤な状態へと移行し治療はさらに困難で長期間に及ぶものとなります。

今回の健康懇話会では手の病気のうち、頻度の高い代表的なものをいくつかご紹介させていただきます。どれも日常生活で出会いやすい病気ですので、正しく病気を理解し治療のタイミングを失わないようにしていただきたいと考えています。

整形外科医長 森田 晃造

このテーマは

平成26年3月14日(金) 15:00から約1時間

の健康懇話会にて講演予定です。

(入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。)

手術室の紹介

みなさんは手術をすることになったら、どのような気持ちになるでしょうか？

手術をして一日も早く社会復帰したい。でも、麻酔はどんな麻酔だろうか？手術室ってどんなところだろうか？手術を選択することは、人生の中で重大な出来事のひとつに入るのではないかと思います。最近ではテレビなどで手術風景をみる機会があるかもしれませんが、それでも手術室は馴染みのない空間であり、「怖い」「入りたくない」というイメージであることには変わりないのではないのでしょうか。

私たち手術室看護師は病棟看護師と協力しながら、手術を受ける患者さんにご家族の不安を少しでも和らげ安心していただきたいと思っています。そのために、手術のあらましを丁寧に説明し、患者さんの疑問にはわかりやすくお答えしています。リラックスしていただくために術前に流す音楽の曲目のリクエストもその際伺っております。また、手術中の患者さんは麻酔がかかっているため自分で何かを言ったり動いたりすることはできません。私たちは患者さんの代弁者となり、様々な状況を把握し対応しています。



緊張感の高い手術室のなかで、私たちの喜びは「回復へ向かう患者さんの笑顔」です。これからも手術を受けられる患者さんにご家族の気持ちを大切にして、安全で質の高い看護サービスが提供できる手術室でありたいと思います。

中央手術材料室主任 小林 真奈美